

風土



瓜 揉みに舌打つて酒足らぬ日や

(句集『竹取』より昭和四十一年作)

「瓜揉み」は胡瓜や白瓜などを刻み、塩で揉み、二杯酢や三杯酢で食べるものを言います。魚介類やハムなどをあしらったものもありますが、桂郎師の時代を考えると紫蘇や胡麻を加えた簡単なものでしょう。決して丈夫でない桂郎師にとって夏負け防止に最適の酒の肴です。さっぱりとした味について酒が進み、買い置きが無くなってしまうました。ちよつとくらめしそうな句ですが、それだけ元気になつた証拠です。

竹 づたひ隣より葛花はこぶ

(句集『竹取』より昭和四十一年作)

桂郎師のこの頃、竹藪の中の「七畳小屋」を借り、「風土」の編集や書齋として使っています。稿の手を休め、庭を見遣ると隣から竹藪を伝ってきた「葛」が花を挙げています。どんなものにも絡みつき繁茂する「葛」はやかいですが、芳香を放つ紅紫の花は魅力的です。「葛花はこぶ」は賛辞です。

桂郎の畦まつ先に火の手あぐ

(句集『木守』より昭和六十一年作)

「桂郎の畦」は桂郎師の「昼蛙どの畦のどこ曲がらうか」の句を踏まえたことばです。器師は忌日だけでなく折に触れ桂郎師を想い起こし句にしています。器師は久しぶりに「七畳小屋」を訪れました。田では畦焼きが始まっています。桂郎師が思い悩んで踏み迷った畦が真っ先に火を挙げています。器師はここできれば桂郎師と魂の交感をするのです。

神々の襖をはずす五月富士

(句集『木守』より昭和六十一年作)

器師の俳句の世界の特徴として、大胆な措辞により対象の本質に迫るものがあります。ここでは「神々の襖」がそれに当たります。「五月富士」はようやく雪も解け、地肌あらわな姿が、緑深い周囲の山々の中に忽然と浮かびあがる雄渾な夏の富士山です。器師はこの「五月富士」の本質を「神々の襖をはずす」ことよって現れたと表現しました。「神々の襖」とは富士山を覆っていた神々しいまでの雪のことです。それが外されました。

しやがめばそこに

南うみを

龍谷大学俳句講座 四句

草鉄砲ぱんと始まる夏期講座

空蟬の渾身の爪触れてみよ

宇治川の雨後の猛りも原爆忌

藤の実のしんと平等院暮るる

草市にしやがめば母の顔そこに

鶏頭の大ぶり挿して父の墓
ざりがにの畦に出てゐる盆の月
ひと雨の地べた匂へる地蔵盆
見えてゐる畑の西瓜供へけり
地蔵会の僧はき物を一瞥す
御詠歌の莫蔭におはぐる地蔵盆
丹田をぐいと落として南瓜割る



竹間集

同人作品



夜の秋

橋添やよひ

打ち水に予後のたつきを立て直す
化粧水ひたひた叩く夜の秋
たたなはる神名備山の太西日
炎帝を抜けてどこか焦げ臭き
藍甕の藍の眩き日の盛り
帰省子の眠り深海魚のごとく
追憶の遠ざかりゆく花火かな

秋の蟬

浅田 光代

そのなかに変声期の子盆の路
秋の蟬鳴きやみしとき風立ちぬ
数珠の影われ一歳時に莫蔭に回るや地藏盆
をさなごに数珠繰り速き地藏盆
学校田稲穂を隔て男子女子
水べりに小さき酪葛の花
秋の蝶加茂の磧をはなれずに

新 聞

柿沼 盟子

片陰のガラスに歪む影の我
禿頭を磨くがごとく汗を拭き
やじろべゑ傾ぎて止まる夏の果
還らざる日の始まりに白木槿
鯉の尾の叩く厄日の澱みかな
残暑なほ読後の新聞膨らみで
葉は土に還りゆく山水引草

庭花火

高村令子

向日葵の影に孤独を見てしまふ
庭石のひたすら石でゐて極暑
悪相の阿修羅も仏百日紅
小鳥来る四囲に山置く無人駅
爽けしや五体を抜ける湖の風
想ひ百ありて一人の庭花火
家族みな違ふポジション 秋灯下

冷し酒

土井 三乙

歩道橋越しに梧桐花散らす
清水湧く桂大樹の木暗がり
夏座敷鯉の跳ねたる音耳に
夏料理はこぶ和服の少女かな
会へば耄の話などして冷し酒
稿了はる雷遠くより去らず
書に倦みて目の追ふ先の石叩

白木槿

林 いづみ

師師の見舞いようやく叶じていつまでも師の掌のぬくみ明易し
風鈴社報の高鳴りつづく夕べかな
稲光妻繪筆はに捧げし句を記し
南無妙告別式 三司と棺の墨痕 晩夏光
「寿光院法道日政信士」露けしや
白木槿 枢に蹤くも縁かな
声明と聴いてをるなり虫時雨

子規の庭

小林 共代

新涼の湖見るベンチ湿りをり
甲斐駒を近くに見せる稲光
薬瓶谷川岳の浜に転がり 厄日過ぐ
かまつかの平茎割れて子規の庭
濡縁の糸瓜も子規の小宇宙
秋めいて錠前錆びし子規文庫
野分中仄かにぬくし夕刊紙

桐一葉

中村洋子

桐一葉本を抜け出す詩の言葉
新涼の旅の始めの法隆寺
大寺に残暑の傘を折りたたむ
万といふ光またたく星月夜
阿波踊り見て来し夜の手足かな
七夕竹夢の多さに撓ひけり
帰省子の大きな靴を陰干しす



奥 大 和

上 辻 蒼 人

雨多き杉山檜山みどり立つ
遠山の雲に膨らみ五月来る
若葉谿弾みて返す山筈
峰々のみどりに力奥大和
何処より木々に弾みを付けし首夏
青葉臯空の眩しき郷に住む
野茨の人拒みぬて真白なる
額の花朝の空気の入替はり
郭公の声引きしめて杣の村
郭公の山河は青を深めけり
葉隠れにいつからぬたる蝸牛
熊野へと傾れ込みたる青葉峰
大杉も巖も崇む峰行者
根の国を目指し吉野の峰行者
初瀬谷仏法僧の陣取れる

第40回桂郎賞俳句部門佳

赤目櫛揃ひ踏みなる坊が垣
手毬花競ひ菅かん主すの昼寝時
御仏はどれも小太り緑さす
神杉を拝みて杣の夏越祭
祭神は井い上がみ親王青葉冷え
老鶯の声の加はる沢の音
蟪蛄のみどりの命生まれたて
翡翠の背せな美しき沢の音
山若葉沢音力みなかりけり
美吉野の闇を濃くせり山蛭
山蛭飛んで己を隠しけり
いつの間に七十余年田水張る
みどり濃き棚田の水を見て回る
草を刈り峡の瘦せ田を今も守る
軒先に声しぼり出す夏つばめ

山河集

同人作品



南うみを選

稲妻に撃たれし喪服師を送る

岡本 尚子

稲光 備前の固き土の肌

稲光 湖蒼き詩歌ひけり

稲妻や空のぶらんこ揺れ止まず

大山は富士の父神稲つるび

秋立つや隙間なくはく乗馬靴

豎山 道助

南瓜煮て南瓜を描いて白樺派

台風に事寄せ京に泊つるなり

蝸や昔キスカの兵なりし

喜寿の妻萩の主となり給ふ

秋立つや耳の奥より師の声す

上村 葉子

品評会子がよぢ登る大南瓜

送り火や黙の会釈の擦れ違ふ

新涼や焼き上がり待つフランスパン
秋暑し死語となりたる餓鬼大将

片桐紀美子

そよ吹くや煙のやうに草の花
爽涼や一枚石の橋の反り
青棗ひからせ路地の日の動く
阿夫利嶺や藁に座したる大かぼちや
稲びかり一船浮かす海の闇

稲光師の杖音の木霊して

中嶋 陽子

富士山の水足し南瓜スープかな
てのひらに握る苔玉今朝の秋
秋暑し区民農地の縄緩び
切り分けてレンジに回る栗南瓜

風土独語／南 うみを



稲妻に撃たれし喪服師を送る

岡本 尚子

名誉主宰の神祕器師は七月二十六日に逝かれました。その悲しみを抱きつつ、稲光に晒された喪服を見つめています。「稲妻に撃たれし」に作者の驚愕の心性が表れています。

八月の闇に包まれ耳尖る

石井 秀一

八月六日、九日の原爆投下、十五日の終戦、そして十三日から十六日までの盆と八月は死者の「たましい」に充ちています。作者は、闇夜の「たましい」の声を聴かんと耳を尖らせるのです。

台風に事寄せ京に泊つるなり

豎山 道助

この句、「事寄せ」がまことに巧みです。それも「京」なればこそです。他の地域ではそういきません。「台風」の大義名分のおかげで、もう一日京に遊ぶことができるのです。

蜻蛉飛ぶ羽虫の高さ測りつつ

池田 光子

「蜻蛉」は飛んでいる虫を捕食する肉食です。蜻蛉は郷愁を誘いますが、現実には「羽虫の高さ測りつつ」飛んでいるのです。「蜻蛉」の本質を捉えました。

品評会子がよぢ登る大南瓜

上村 葉子

最近では外国産の大南瓜をよく見かけます。大きさと重さを競う品評会に並んだ大南瓜。それに小さな子供が取りつき、よじ登ろうとしています。南瓜の大きさを鮮やかに描きました。

磯桶を小屋に干しある帰燕かな

下山田美江

燕は九月中旬から十月にかけて南に帰ります。色々な素材がありますが、作者は海女小屋の「磯桶」と取り合わせました。海を渡る燕たちにもみるみる小屋が小さくなっています。

爽涼や一枚石の橋の反り

片桐紀美子

「爽涼」は秋の大き澄みきつたすがすがしさを言います。庭園の池の橋でしょうか。秋気の中にくっきりと「石の橋の反り」が見えます。「爽涼」の感覚なればこそです。

稲光師の杖音の木霊して

中嶋 陽子

これも神祕器師の死を踏まえた句です。師は晩年杖を使っていました。作者には思い出深い杖です。師と共にあつた日々をたどると、雷光の中から、かすかに杖を突く音が聞こえてくるのです。

鶏のふり回しをる大蚯蚓

谷田明日香

俳句は季語に一つの素材ぐらいいい。それをことばでどう繋ぎ、ざりアリティを出すかです。ここでは「ふり回しをる」で繋ぎ、放し飼いの鶏の荒々しさを表出しています。(以下略)

風土集



南うみを選

妻留守の広き食卓夜の秋

神奈川

石井秀一

八月の闇に包(くる)まれ耳尖る

稲妻や相模の野面ほしいまま

まだ熱き南瓜天ぷらサクと噛む

人踏まぬ脇道狭し草は穂に

峰雲やうんていの子の力瘤

岩出

池田光子

草引くやばつた子ばつた八方に

蜻蛉飛ぶ羽虫の高さ測りつつ

苔玉の苔に水浸む朝曇

はつらつと子の丈越して蓮大葉

横浜

下山美江

「吸いがらの捨て場にあらず」蟬の穴

店棚の百の面相ペポ南瓜

磯桶を小屋に干しある帰燕かな

子は母を母は子を呼ぶ秋の浜

水引きの花咲く頃や蝶の道

生れたての滝風一心に浴びる

舞鶴

谷田明日香

鶏のふり回しをる大蚯蚓

揚羽蝶男滝女滝を往きかへり

猫ひたと添へり台風過ぐるまで

集ひきては風起こしゆく赤とんぼ

傷音のふえしレコード終戦日

横浜

赤石梨花

チマチヨゴリの国に住みぬし終戦日

ざらざらの樹肌に触れて夏の果

投函の音のかそけき残暑かな

稲光劇中劇は閉ぢにけり

結ひ上げし母と娘の祭髪

川崎

村瀬恵美子

踊の輪崩れんとして崩れざる

鎌倉や暮れて濃くなる夏木立

切れ切れの吹奏楽や夏休み

咲き満ちて雨に重たき百日紅